



妄想の彼方にて



いちごはニガテ

烏

夕暮れどきの田舎道

烏が一羽とまってる

うつむき歩く僕の上

電信柱でやすんでる

見上げた僕など意に介せずに

静かに夕日を眺めてる

オマエのキモチを教えて欲しい

群から離れた心の内を

オマエのリユウを聞かせて欲しい

孤独に生きるその意味を

呟く僕を意に介せずに

一声鳴いて烏は翔んだ

僕を残して翔んでった

闇の底で

優しい言葉の本当の意味を

甘い夢の世界の舞台裏を

知らされた ボクは

堕ちた

暗く深い闇の中に

闇の底へと

再び堕ちた

二度と夢など見ないだろう

二度とヒトなど信じない

虚ろな抜け殻に戻った僕は

優しい夢など見ぬよう

甘い言葉など聴かぬよう

双眸を抉り

両耳を塗りこめ

口だけを残した

終わりになき嘆きと百萬もの呪詛を

未来永劫吐き続ける為に

暗い暗い深い闇の底で

孤独に虚無と戯れながら

華と夢

華は枯れてしまうから

華は萎れてしまうから

はなから咲くのを辞めましょう

夢は消えてしまうから

夢は終わってしまうから

夢見る事なぞ辞めましょう

儂く虚しい毎日を

ただただ無為に過ごしましょう

咲かせず夢見ず淡々と

晒し者

公園の木の枝に

僕はぶる下がっている

苦痛と苦悩から解放された筈なのに

しがらみと営みを断ち切った筈なのに

浮かない顔でぶる下がっている

こんな筈じゃなかった

思い止どまれば良かった

ぶる下がった骸は

全てを垂れ流して

悪臭を漂わせ

苦悶の表情のまま

醜い醜態を晒している

後悔の嘆きは誰にも届かない

何かに感謝

君に逢えて良かった

君と話せて良かった

ほんの僅かな時間だったけど

君と過ごせて良かった

あの頃と何も変わらない君

少しだけ落ち着いた君

あの頃とは様変わりした僕

相変わらず子供な僕

今日の喜びを

今日の感激を

僕は感謝

何も信じない僕だけれど

今日ばかりは 何かに 感謝

僕と君の時間は 今日から再び重なった

これからもずっとよろしくと

君に伝えたい

呻き

この男の言葉は

ただの呻きにすぎない

絶え間ない苦悩と

耐えがたい孤独が生み出す

重い呻きにすぎない

わかってもらえるはずもなく

耳を傾ける者さえも既にな

なのに男は

沸き上がる呻きを

止めようのない悲鳴を

今夜も綴る

孤独で冷たいこの部屋の片隅で

ぼくはなりたい

ぼくはなりたい

くもになりたい

いそがしいひびなどわすれ

わずらわしいものたちをみすて

じゆうにいきていきたい

ぼくはなりたい

くもになりたい

網を張りただじっと過ごす

この黒い蜘蛛の様に

心の中のアクマと...

僕の中のアクマが囁く

「思い切ってやっちゃえば？」

すかさず制する別の声

「止めといた方が...」

僕をそそのかす 黒翼のアクマ

それに反する別の声

でも

それは白翼の天使じゃなくて

怠惰な獣

全てを投げ出すなまけもの

闇の住人の僕には

天使な心なんて居やしないのさ

会話

割れちゃったね

うん 割れちゃったね

カレの心は割れちゃったね

うん 割れちゃったね

そしたらカレ自身 壊れちゃったね

うん 壊れちゃったね

ヒトなんて簡単に壊れちゃうんだね

うん 簡単に壊せちゃうんだね

心を砕けば簡単に

そう こんな風にね

穏やかな世界

ヒトは目でみて周りをうらやむから

憎しみを覚えるのだ

ヒトは耳で聴き悩み惑うから

疑いを覚えるのだ

ヒトは口できき騙し嘯く事で

争いの種を産み落とすのだ

手を使い壊し殺し

脚を使い分別なく歩き回り

他の場所他のモノを踏みにじる

ヒトが手足などなき存在ならば

さぞこの世は平和だろう

顔さえなく ただの無垢な固まりで

何も動かず周りに何もできない

虚ろな存在だったならば

さぞこの世は平和だろう

さすれば

穏やかな世界となり得る事だろう

争いなき世界が訪れるに違いない

あした

毎夜

明日が来なければと

明日なんか来なければ

良いのと思う

そして 明日を迎えた翌朝は

目覚めなければ良かったと

僕は嘆くのだ

嘆く君へ

君の嘆きを 全て消せないけど

君の苛立ちを 多くは減らせないけど

ただ 言えるのは ただ 言いたいのは

君だけじゃない 悩んでるのは君だけじゃない

君は独りぼっちじゃない 少なくとも僕がここにいるんだ

君の問いには 上手く答えられないけど

君の手助けには なれないかもしれないけど

僕は聞いてあげれる 僕はうなずいてあげれる 僕は君と一緒に悩んであげられる

だから

だから

そんな風に嘆かないでいて欲しい

いつものような君でいて欲しいと

僕は 切に 切に思ってるんだ

相談事

できるだけなんて言わないよ

できる事しかしないから

できない事はできないしね

素っ気無くて とても冷たい僕の返事に

君は微笑んで頷く

やっぱり君は僕の一番の理解者で

無口で内気な僕は

心の中でちょっとだけ思う

やっぱり君が大好きだと

或る野良猫のつぶやき

僕は住処も無くいつもお腹を空かしてる

寝床と食べ物を探して

今夜も街を彷徨ってたんだ

でも あの けたたましいクルマのヤツが

僕の身体をひき潰して

もう動く事さえできない

途切れ途切れの鼓動と意識の中

これでもう 食べ物も

安らぎなんかも

探さなくてすむんだ と 僕はつぶやいた

別にたいしたことじゃない

ヒトをホオムリサルなんて

簡単な事さ

特別に憎しみなどいらぬし

邪魔な物を片付けるように

軽い感じで

特に気を張る事もないし

周りを見渡して軽く押せば良いだけだから

気分すっきり

綺麗さっぱり

過ごしやすくなるからね

一人ぐらい減ったって

世の中普通にまわるから

一人ぐらい減ったって

たいした事じゃないからね

colors

やっぱり大好きと 何度もつぶやく君が

愛しくて

柄にも無く照れた あかい顔を見せるのが

恥ずかしくて

僕は君を ぎゅっと抱き寄せる

空はなぜ

こうも あおく

すみわたっているのだろう

海はなぜ

こうも 深く

あああおとしてるのだろう

理屈では知ってるはずなのに

頭では理解してるはずなのに

空や海 そして

遠くの山々が あおくかすむ情景に出会うたび

言葉をなくした僕がいる

白い色は嫌いです

悲しい思いを呼び戻すから

辛い記憶に苛まれるから

白 悲しみの始まり

病室のベッド

白 悲しみの結末

別れの装束

白はいつの時も

悲しみの羽で舞い降りて

辛い痛みを分け与えてくれたのです

果てしなく長かった辛い時間は

今でも僕の底に傷跡を残して

トラウマの様に脅かすのです

だから好きになれないのです

悲しみと痛みを伴う

白い色が好きになれないのです

ソラ

明けぬソラは

未だ明けぬソラは

闇と静寂に満ち満ちている

僕の心と重なる

collector

君には羽などないけど

蝶のように愛でてあげよう

君の笑顔は美しく

蝶の羽にも勝るから

蝶の如きに扱おう

ガラスのケースに押し込めて

君の笑顔が朽ちぬよう

姿形が褪せぬよう

怖がる事などないんだよ

永久の笑顔を僕のため

むしろ悦ぶべきだろ

永久の時間が

待ってるのだから

あざ笑う

孤独を気取って

フレアイを求めている

冷血を語って

愛情を探してる

どちらが本物の僕なのだろう

単なる道化にしかすぎないのか

どちらも影にしか過ぎない事を

真の僕はあざ笑う

無駄な事

まいにち まいにち

謂れなき酷い仕打ちに

耐え続けて来た彼女は

くるひもくるひも

耐え難い孤独に

恐れ悩み暮らしていた彼は

或る日 終に其の脆きイトが切れ

思いを遂げた

それは

今この瞬間に世界のどこかで訪れ続ける

意味なき無駄な生の終わりと変わらなかった

周りも社会も世界も歴史も揺るがない

意味なき無駄な出来事の一つにしか過ぎなかった

アイニツイテ

僕はヒトをアイさない

優しさ故に

争いを好まぬ故に

____の如くは振る舞えない

全てを許し

全てをアイす事など

僕には到底無理な事

時にヒトは

仲間の為

友人の為

恋人の為にと 闘い争う

アイするヒトの為

アイするが故に 争うのだ

全ての罪を許し

全てのヒトビトをアイす事など

僕には到底無理な事だから

僕はヒトをアイさない

争いにと続かぬように

ヒトなど決してアイさないのだ

一日

疲れと苛立ちは

つくり笑顔など

粉々に打ち砕き

終始無言で

終始無言で

一日をやり過ごす

海

青い

青く澄んだ海など見た事がない

眼前の光景は

どんよりと濁り

暗い憂鬱な面差しの僕と似ている

寂しい兎は

ほんとは知っていた

ほんとはわかっていたんだ

寂しいウサギは

僕の方だって

いつだって寂しくて誰かの手を捜してる

鏡に...

鏡に映る見慣れた顔

優しさの欠片もなく

暗く沈んだ冷めた顔

こけた頬

剃り残しの髭のあと

この顔は何を考えてるのか

闇色の瞳は何を映しているのだろうか

その閉ざされた重い口は何も語らない

その乾ききった疲れた心は何人も寄せ付けたりはしない

鏡はいつも真実しか映さない

鏡は決してお世辞など言わないのだ